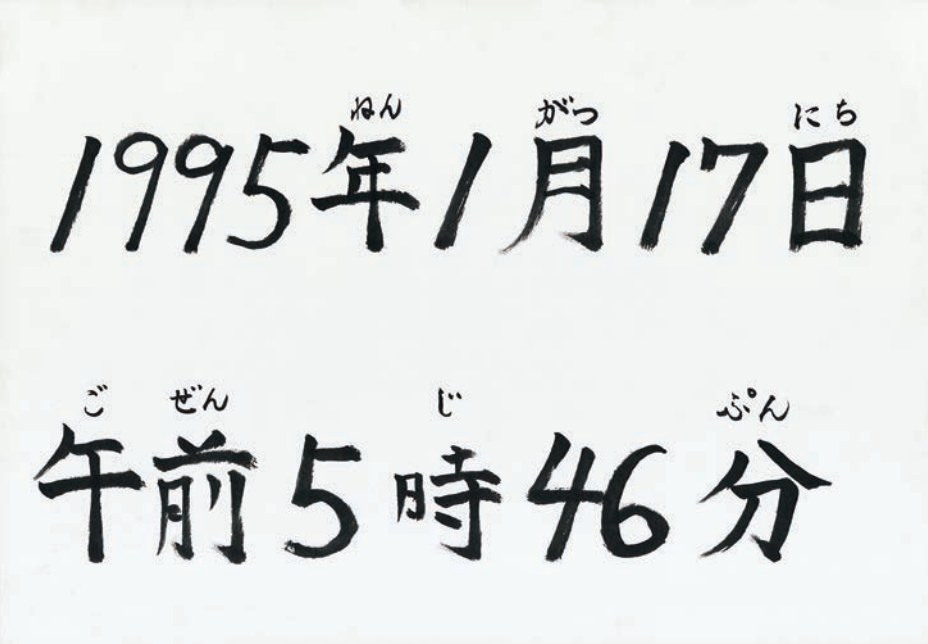
西宮市・西宮市教育委員会

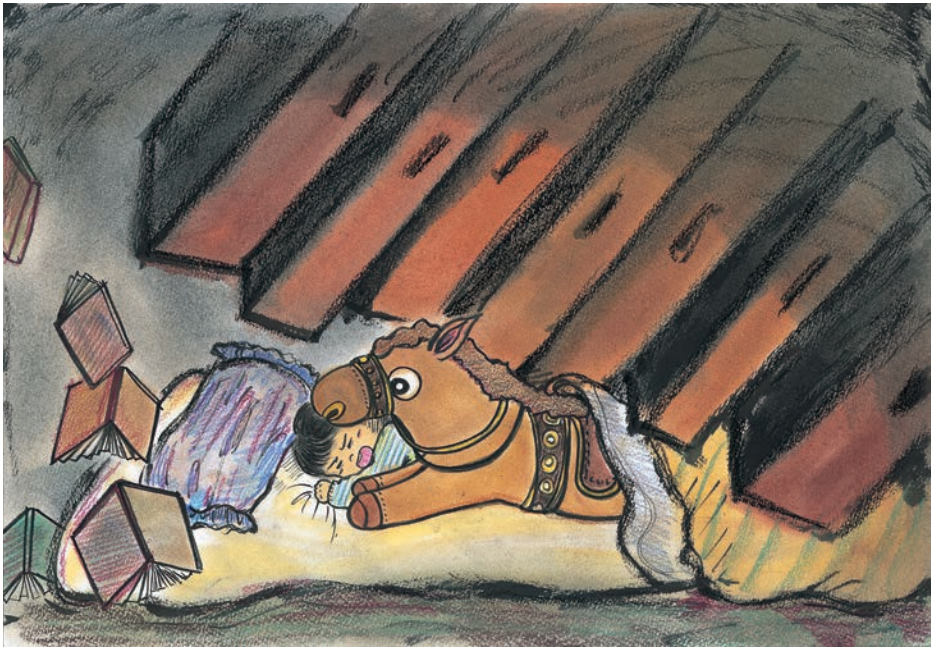


1995年（平成７年）１月17日
午前５時46分

震災当時、私は小学校３年生でした。
学校の近くのアパートにすんでいました。

朝早く、ものすごい音で目が覚めました。
「何？何がおこったん？生きてるん？」
重たいタンスが乗っかっていて動くことができません。

「今助けたるからなぁ！まっときや！」
と、お母さんがタンスをどかして助けてくれました。



となりで寝ていた妹も、その日はたまたまお年玉で
買ったばかりの大きなロバのぬいぐるみと寝ていたので、
直接タンスの下敷きにならずに、無事助け出されました。

やっとのことで家の外に出ると、町が真っ赤に燃えています。
やっとみんな、「今のは地震だったんだ。」ということが分かったのでした。
いつもの見慣れた景色がめちゃめちゃになっています。道路はゆがみ、２階建てだった向かいのアパートは、１階部分がすっかりぺしゃんこです。

隣のお家のお父さんが先頭に立って、「みなさん！ここは危ないから、
とりあえず高架下に移動しましょう！もう少し明るくなったら
近くの小学校に避難しましょう！」と、声をかけてくれました。
毎日通っていた小学校までの道もわからなくなるくらい、被害は
ひどい状況でした。道路が割れていたり、あちこちにガラスが飛び散って、
電柱がすべて倒れており、電線の下をそうっとくぐりながら、なんとか
小学校までたどり着きました。

ここは小学校の体育館です。「はぁ・・・寒いねぇ。」がれきの下から引っ張り出してきた１枚の毛布を、近所のおじちゃん、おばちゃん、お兄ちゃん、お姉ちゃん、小さな赤ちゃんも、みんなで使って寒さをしのぎました。
そうしているうちに、体育館は避難してきた人たちでいっぱいになりました。
舞台の上も人でいっぱいです。途中、何度もおそってくる余震に、
「うわぁ！天井がおちてくる！」と泣き叫ぶ人もいました。

しばらくして、担任のひさ子先生が駆けつけてきました。
「ちえちゃん！無事で良かった。」と、抱きしめてくれました。
ひさ子先生の顔を見ると、なんだかホッとしました。

お昼になると、クラスメイトの半分が集まりました。みんなで顔を見合わせて
「生きてて良かった！無事で良かったな！」と、喜び合いました。
それから、それぞれが地震が起きたときの様子を報告し合いました。
まもるくん「僕んとこは、食器が全部割れてた。階段も傾いてた。家族は大丈夫やったけど…」
あゆみちゃん「うちとこは、向かいのアパートがひどい火事で。おばあちゃんが一人亡くなってしまってん。」
すると、クラスメイトの一人が走ってきて言いました。「けんた君の妹がまだ瓦礫の下にいるらしい！でっかい柱が足の上にのってて、ぬけられへんって！」

けんた君は、瓦礫の下に閉じ込められている妹のひかるちゃんに向かって「ひかるー！がんばれよー！」と泣きながら叫んでいました。
３時間後、救急隊の人たちが駆けつけてやっと助け出されましたが、ひかるちゃんの足は紫色になり、ぱんぱんに腫れ上がっていました。病院に運ばれましたが、あと少し遅かったらひかるちゃんの足は手遅れになっていました。

その頃、地震のニュースは世界中に発信されていました。
「今、神戸や西宮が大変なことになっている！」と、ボランティアの人たちが駆けつけてくれました。生活に必要な服や食べ物を届けてくれました。また、地震の衝撃で水道は完全に使えなくなっていました。
水がないと困ることばかりです。お風呂には入れないしお顔だって洗えません。トイレの水も流れません。体は寒くて凍えているのに、温かい飲み物を飲むことだってできないのです。

そんな時、近くにいたボランティアのお兄さんがガスバーナーを持っていたので、ペットボトルの水を沸かして、カップラーメンにお湯を注いでくれました。
一つのカップラーメンの汁を５,６人の友達と回して飲みました。
「本当においしかったなあ･･･！」
後で、ひかるちゃんの手術が無事に終わったと聞きました。
でも、元気に歩けるようになるまではとても時間がかかったそうです。

小学校でも二人のお友達と、当時の校長先生の尊い命が奪われました。
まだ１年生だったみよちゃんは発見されたとき、保育園に通う小さな妹と仲良く手をつないだまま亡くなっていたそうです。
『もっと、もっと　生きたかっただろうな。』
生きることのできなかった小さな命のことを思うと、私は今でも心が痛いです。

みんなに、ここでちょっと考えてもらいたいのです。
お家はなくなっても、またいつか新しいお家に住むことができます。
でも震災で家族を失った人たちは、震災から19年たった今も
当時の話を口にすることができません。
悲しみや心の傷がいつまでも消えない人たちがいることを
決して忘れないでくださいね。

当時は子どもたちも自分たちでできることを精一杯探しました。
水をもらうためにタンクを持って並んでいる子。
家族のための食料をもらうために並んでいる子もいました。
自分勝手に遊んでいる子は一人もいません。
大人も子どもも、「この町をもう一度建て直そう！あきらめないでがんばろう！」
そう心に誓ったのです。
誰もが、「自分にできることは何かな」と真剣に考えて行動したのですよ。

これからも私は、当時何があってどんな風に人々が助け合ったのか、
どんな風に心と心の絆が生まれたのか、伝えていくつもりです。

1、17を

決(けっ)して

忘(わす)れない。

～廣瀬　智恵さんのプロフィール～

阪神淡路大震災で自宅が全壊。震災当時、小学３年生だった廣瀬さんは、震災のショックで笑うことを忘れた。先の見えない仮設暮らしのつらさを、絵はいつも癒してくれた。絵との出会いは、被災児童を励まそうと旧ユーゴスラビア（現セルビア）が企画した、震災直後の招待旅行である。武力紛争で家族や家を失いながらも、絵画やダンスに取り組む現地の子どもたちの姿に感動し、心の癒しを得た。鮮やかな色遣いで画用紙一杯に描く子どもたちの絵に、くぎ付けになった。短大で美術を専攻し、小学校の図工の教員になり、母校に赴任。防災担当の同僚から、被災時の学校の様子を子どもたちに話してほしいと依頼され、記憶を頼りに絵を描き紙芝居を作成。2010年1月17日に平木小学校で校内放送された。現在、子育て真っ最中のママである。

※文中の名前等は仮名です。

人権文化の花咲くまち　西宮をめざして 15

平成26年（2014年）３月発行
西宮市・西宮市教育委員会

文・画　廣瀬　智恵

西宮市役所１階市民相談課において、人権相談を実施しています。
（日常生活上の差別、いやがらせなどの人権問題）
毎月第１･第３木曜日午後１時から４時まで（受付は、３時30分まで）
お問い合わせは人権平和推進課（35－3320）まで

平成26年（2014年）３月発行

編集：西宮市
〒662－8567　西宮市六湛寺町10番3号　☎（0798)35－3320